

ぷれみあむ
premium
みにっつ
minute

第6集

——パンダマン登場！
やっと謎が明らかに
なるんっすか？ の巻

☆ shiroa ☆

パンダマンはそこに立っていた。

「ようやく着いたか。待ちわびたぞ、弁慶」

「パンダマン殿、お待たせした。光線円盤の整理に手間取ってしまったな、はっはっは」

「弁慶らしいな」

パンダの被り物に、スーツ姿。カエルもそうだが、可愛いというより怖い。どこか強盗にでも入っていきそうな雰囲気だ。

「あなたがパンダマンですか！ いや、何かとお世話になりました。訊きたい事が山ほどあるけど、ここで答えてくれるんですか、よそに行ってからっすか？」

俺が人懐っこく笑いながらいうと、パンダマンは一言、「弁慶」と言った。その声を聞いた弁慶は俺の左腕を掴むと背中の方へ乱暴にねじり上げた。痛い！

パンダマンが近づき、俺のポケットをまさぐる。こいつらの狙いは、宝くじだ！

「ミユウちゃん、逃げろ！」

こいつらは敵だ！ パンダマンは俺から宝くじを奪うために逃亡を指示しただけ。弁慶は仲間ではなく、罠だった。

ミユウちゃんは足がすくんで動けない様子だった。信頼していた弁慶の裏切りに、大きく動揺しているのだろう。安心感から一変、得体の知れない二人組となったパンダマンと弁慶。この先の見えない状況。これは生まれて初めて感じる種類の恐怖だった。

「抵抗するな、無駄だ。お前は雲だ。俺の許に運をはこぶ雲だ。その仕事をしっかり果たしたお前に、特に危害は加えない。もう、お前は用無しだ。お前につけられているGPSも取っておいてやろう。これでカエルマンとタコ頭に追われずに済むだろう」

パンダマンは俺のポケットから宝くじと新聞の切れ端を取り出した。それを数秒眺めると、自分のポケットに仕舞った。

パンダマンはしゃがむと、俺のスラックスの裾をまさぐった。

中学生の頃、母は初めて着る制服姿の俺を見て、言った。

「これから男の子は身長が伸びるの。だから、ズボンの裾はこうやって折り返して縫っとくわね」

「カッコ悪いよ、折り返しが無い方がいいよ」

「まあまあ、親の言うことはきいとくものよ」

——ほどなく俺は身長が伸び、ズボンはつんつるてんになった。

「ほら、いったでしよ。ズボン貸しなさい」

「何するの？」

「この折り返しをほどくの」

母はズボンのすその折り返しをほどき、もう一度俺にズボンを穿かせた。

「おお、すげー。ちょうどいいや」

折り返しは消え、まっすぐなストレートになった。

純粋に感動している俺を見て、母は幸せそうに笑っていた。

俺はこの体験から、ズボンを買う時は必ず折り返しできるものは折り返しで縫ってもらようにしている。いつなるときまた身長が伸び、つんつるてんになるかも知れないからだ。

「成長期は終わったんだから！」

周りの人間はそう突っ込みをいれる。入れたい人は入れていればいいさ。俺は自分のポリシーを貫く。

スラックスの裾からパチンコ玉が出てきた。パチンコ玉はパンダマンの指先で鈍く光った。

「すごいだろ。俺達の仲間の傑作だ。この中にGPSのシステムが組み込まれていて、お前の位置をリアルタイムで監視出来ていたわけだ。そしてそれをお前に気付かれずに狙撃し、取りつける技術もある。まさか隣のビルから銀玉で狙撃し、こんな場所に正確に入れるなんて神技。びっくり人間コンテストでもお目にかかれないぜ」

「まったくでござるな」

くくくく、とパンダマンは笑った。

はっはっはっは、と弁慶は笑った。

「これでもうお前には用はない。お前に迫っていた危険も去る。まあ、今日は家に帰ってゆっくり寝ろ。そして明日からは普通の生活に戻れ」

弁慶が俺の腕を放した。ゆっくりとした足取りでパンダマンと弁慶が公園を出ていく。弁慶がいる限り、宝くじを奪い返すことは不可能だ。俺は呆然と二人が去っていくのを見ていた。無力だ。情けないくらいに無力だ。ミユウちゃんが特に危害を受けなかったのは不幸中の幸いか。

「ちょっと待って。ひとつだけ教えて」

俺はふと脳裏によぎった疑問を質した。なぜそんな事を言おうと思ったのか。俺もよく分からなかった。こんな、どうでもいいこと。はやく去ってもらった方が安全なのに。

「どうして俺が逃げる方角を、北北西って指示したんだ。見ず知らずの他人、まだGPSもついてないから正確な場所は判らなかつたはず。しかも宝くじをその時まで持ってなかつたのに。何の根拠で示したんだ」

そうなのだ。パンダマンは知らないはずだった。宝くじを俺が持っていないことを。そして宝くじがアパートから北北西に向かった先にある駅に保管されていることを。何か得体の知れない超能力でも持っているのだろうか。

「いまいわからないことを云うが、まあいいか」

パンダマンはゆっくりこちらを振り向いた。

「聞きたいか」

俺は肯いた。

「お前はこれから逃げなければならない。逃亡する、どこの方角に？ と考えた時、俺の脳裏にある映画が思い浮かんだ」

弁慶がクイズ番組にでも答えるかのように言った。

「解せたでござる。ヒッチコックの『北北西に進路をとれ』でござろう」

「ライト！」

パンダマンを手でピストルを作り言った。正解、ということか。

「とにかくアパートから出てどこにでも逃げれば良かった。お前がどこに向かっていいか分からないというのなら、目標をあげたほうが効率よく逃げられるだろう。ただ、それだけだ」

そして二人は去っていった。

俺とミユウちゃんは公園に取り残されてしまった。

ミユウちゃんが無事だったのは幸いだった。こんな幕切れ、本当、格好悪い。

「……俺の携帯、無駄だったね」

「まさかズボンの裾にパチンコ玉が入ってたなんて、考えもしなかった。思い返せば中学生の時、弟のズボンの裾からコクワガタと花の口づけっていう飴の空き袋が出てきたことあったわ」

花の口づけという飴は、個装の袋に花の絵と名前が印字されており、それを見るだけでも勉強になりそうな袋飴だ。

「コクワガタも確かに小さいけど、そんなのが入ってて、よく気付かなかったね」

「洗濯の時、初めて気付いたのよ。ある意味ポケットよね」

「細かな石とか、そういうのが出てきたことあるけど、コクワガタは意外だなあ」

世の中不思議が溢れている、そう世界はミステリーなのだ。

「ミユウちゃん、ごめんね。宝くじとられたね」

「いいよいいよ。宝くじは夢を買うものだから。それに二億円を手に入れるって、それなりにプレッシャーかなとも思ってたし」

まあ俺たちが買った宝くじじゃないんだが。

「宝くじよ、夢よ、ありがとう。……さて、これからどうしよう」

俺はまた日常に戻らないといけないのかと思うと、少しうんざりした。昨日の今日だ。上司に何言われるか分からない。いつそ会社を辞めてしまった方が気が楽かもしれない。

「とりあえず縛ってあるカエルさんたちを助けない？」

「そうだね。それだけでもスッキリさせとかなないと、シツクリしないよね。カエルたちも助ければすべて話すって言ってたし。もう俺たちは宝くじ持ってないし危険は去ったわけだから。縛ったままだとカエルたちも可哀想だもんね」

ミユウちゃんもこっくりとうなずいた。

そして俺たちは長命寺の境内へ向かうことにした。

「……けど、弁慶に腕とられた時、まじで恐かったよ！」

抵抗不可能な大きな力に自由を奪われることがこれほど怖いことだとは思わなかった。

「あたしも拉致されたらどうしようとか思っちゃった」

二億円は惜しい。けど恐怖を伴う二億円ならば、今の虚脱感溢れる安心の方がいい。現金なもので、俺はそんなことを思っていた。

角を曲がるとタコヤキがのびているはずだった。が、そこにはタコヤキを日陰に動かしている人物がいた。タコヤキはまだ意識が戻ってないようだ。そのまま眠ってしまったのだろうか。俺

たちは素知らぬ顔で通り過ぎようとした。

「さて。ワイシャツ姿の若い男。もしやお前たちか、仲間をやったのは」

ほんのりと金属の臭いが漂っている。ブルーの作業服を着た長髪の男は、俺の方を向き呼び止めた。

どきっとした。けれど、もしばれたとしても、もう俺たちは宝くじは持っていない。あいつらの組織にすでにわたっているもの。せいぜい仲間がやられた腹いせで殴られるくらいだろう。それくらいは……、嫌だけど我慢しよう。

「ええと、まあ、そうっすね。正しくはないけど」

俺は肯定して否定した。なかなかできることじゃない。

「お前の仲間がやったのか。確かにその体格、身のこなしではタコヤキをこうものせるわけがない。その仲間はどこだ？」

変なことを聞くな。弁慶は結局コイツらの仲間だったってことだろ？

「知らねえっすよ。結局俺たちを裏切ってパンダマンとどっか行ったっすから」

切れ長の目をしたこの男、意外と美形だ。

「パンダマン？ まあいい。いずれ報復はさせてもらおう。俺はエロスと呼ばれている。サカナに頼まれタコヤキを助けに来た。俺の職場から近かったからだ。それが俺の目的。宝くじを奪うことも、報復することも、今の俺の目的ではない」

なんだ？ この男は何を言っているのだ？

「いずれ再びまみえることがあれば、容赦はしない。少なくともタコヤキがやられた時にお前は敵側にいたことになる。これだけで今は勘弁してやろう」

男は瞬時にポケットから銃を取り出し、放った。

俺の額に激痛が走る。……が、生きている。どうやらモデルガンだったようだ。BB弾が弾け飛んだ。

「痛い！ 勘弁して下さいよ！」

俺は恐ろしくなっていた。なんだコイツらは！ あの動き、普通じゃなかった。西部劇のガンマン並みの早撃ちだ。

「サカナは追跡する。お前たちに用ができたなら、正式な姿で会いに行こう。今は、消えよ。……とくにタコヤキが目覚ます前にな。こいつが暴れば、俺も簡単には止められない」

そう云ってエロスはほくそ笑んだ。

「い、行こう」

俺はミユウちゃんの方を向き言った。ミユウちゃんも緊張しているのだろう、肩をすくめて俺を見ていた。

俺はミユウちゃんの手をとり、足早に歩いた。

しばらくして振り向くと、エロスと名乗る男はタコヤキを背負い、立ち去っていこうとしていた。

とりあえず、危機は去ったようだった。

お寺の駐車場近くまで来て、ミユウちゃんは言った。

「本当に危険はもうないのかな」

「もう、無いよ、無いに決まってる。だからエロスってヤツも俺たちを襲わなかった」

「けど、正式な姿でとか言ってた。追跡するとか」

「サカナが追跡するって？ もう俺にはGPSはついてないんだぜ。そんなの無理に決まってるよ。きっとパンダマンが取り除いたの気付いて無いんだよ」

「そうかなあ、そうならいいんだけど」

エロスのあの冷たい目。本当に人を殺めそうな冷酷な瞳に感じた。

「ところでタコヤキって俺勝手にあだなつけて識別してたんだけど、仲間内でもあいつそう呼ばれてたんだね！」

俺はできるだけ陽気に言った。

「本当ね、タコヤキのにおいがぷんぷんしてたから、みんなにタコヤキってあだなつけられちゃうんじゃないかしら」

ミユウちゃんから少し笑顔がもれた。良かった。

「よし、その辺も含めてカエルたちを詰問しよう。それですべてが分かるはずだ」

俺たちは境内につながる階段に足をかけた。

☆ 9 ☆ カエルたちを救え！

カエルたちは縛られたまましょんぼりしていた。なんとなく妙に感じたが、その違和感の正体まではわからなかった。

「パンダマンにやられましたよ。弁慶もあんたらの仲間だったんですね。もう縛ってる意味もないから、縄、ほどいてやるっすよ」

カエルは俺を見た。着ぐるみの頭部のため、どんな表情なのか分からないのが不気味だ。ハチマキはサングラス越しだが何か釈然としないことがあるような、しっくりこない表情をしていた。

「とにかく、助けてもらえれば恩に着る。このままだと俺たちは確実に命がなかったからな」

「またまたあ、もう宝くじはカエルさんたちの組織に渡ったんだから、もう関係ないんでしょ」

ミユウちゃんが笑顔で言った。

「はあ、お前ら、根本的に勘違いしてるな。とりあえず早くほどけ、そしたら教えてやるよ。全てな。それに弁慶は俺達の仲間じゃない。初対面のワケのわからない男だ」

カエルは語った。

嫌な予感が走った。俺の胸の動悸は不安定に高鳴った。まるで胸が自分のものではないみたいだった。

「わかったよ。とにかく俺は朝からワケわかんないまま、ここまで来たんだ。しっかりと説明してくれよな」

俺はカエルとハチマキの縄を解いた。もし弁慶とカエルたちが仲間なら、こんなにきつく縛ったりはしなかっただろう。タコヤキが助けられているのなら、カエルたちにも誰か救出に来ていてもおかしくない。

何がどうなっているんだ？ 俺にはまったく意味が分からなかった。

「パンダマンと、カエルさんとは仲間なんでしょ？」

ミユウちゃんは訪ねた。

「まあ、仲間というか、同じ団体だな。けど、そんなところから話していたんじゃ全く話が見えてこない。俺にも分からないことがおきているようだしな。とにかく、まずは大雑把な状況から把握した方がいいだろう。

俺たちは雲運運団という組織に入っている。別に新興宗教じゃない。ただの私設団体だ。そこで俺たちは幸せになる研究をしているんだ」

そういうのって怪しい宗教ではないだろうか。

「ウンウンウン団？」

「はじめて聞くと奇異に感じるだろうな。初めのウンは雲、続く二つのウンは運勢の運。雲のごとく運をはこぶ、という意味を込めてウドの大木こと、我らが先生が決めた団体名だ。なかなかカッコウいいだろう」

「えええ、だっさーい！」

ミユウちゃんは忌憚なく言った。

「だって、〇〇コみたい！」

ミユウちゃん、それは言いすぎだ！ 俺の心配をよそに、カエルたちはそれほど気にしていないようだった。

「まあ名前は記号に過ぎない。この雲運運団に俺たちは入っていた。俺たちは下っ端だが、パンダマンは幹部の一人。お前たちにGPSの銀玉をとりつけたシューターや、その銀玉を開発したハカセと、粒ぞろいの天才が揃っている結構すごい団体なんだからな。そこで下っ端の俺達も何か特技なりを身につけないといけないと思ってな、タコ頭と共に格闘技を習いに行ったんだ。このあたりで習える格闘技をスマートフォンで調べると、朝真会館というところが出る。極真会館からの分派らしく、実際にパンチを当てるフルコンタクト空手だ。これなら強くなれるかも知れない、そう思って俺たちは入門したんだ」

朝真会館？ 聞いたことの無い空手道場だ。こういうのはその道の人たちにとっては有名だったりするのだろうか。

「それから間もなく、雲運運団で大きな動きがあった。大きな幸運がこれから運ばれてくるといふ。それを実現するために、幹部たちは日々会議を重ね、行動にうつっているらしかった。運命の日ドラマチックジャンボ宝くじの当選番号発表の日、つまり昨日だ。俺たちの組織は幸運を呼び込むのは自分たちの努力だと考えている。何もしないで、お祈りしているだけで幸せになる。そんなことはありえないと言っているんだ」

そこだけきくと、なんとなくまともに感じる。神様に祈ってなんでも夢が叶うんだったら、世界に貧困は存在しないだろう。

「エクステーの一週間前、俺たち末端の団員にもその計画が明かされた。ドラマチックジャンボで一等をとり、二億円を手に入れるという。なんだか嘘のような話しだろ」

「ええ、努力の話のあとに、宝くじって全く説得力ないっすね」

しかし現実としてある。その計画は成功したのだ。

「にいちゃん、そうなんだ。そんな嘘のような話しだが、現実になったんだよ。俺たちだってそのカラクリを教わっても、まだ信じられなかった。いくら雲運運団の幹部が優秀でも、二千五百万分の一だとか、それくらいの確率のモノを的中させるなんて無理だ」

「ねえねえ、そのカラクリってどういうのだったのお」

ミユウちゃんは興味深げだ。

「そうだなあ……。よし、ついでだ。教えてやろう。幹部の知り合いに抽選会の内部に通じる奴がいて、そいつから抽選機を保管している場所を教わったらしい。そこに我らがハカセが行き、細工を施した。これで雲運運団が狙った一等の番号が作為的に作れるようになったということだ。な、嘘みたいな話だろ」

カエルの口調は心なしか楽しそうだ。

「全くですね。嘘みたいです。けど、それが本当になった」

「まあ先を急ぐな。俺もタコ頭もそんなこと信じられなかったさ。笑い話の種くらいに考えていたさ。それで話しちゃったんだよ、外部に」

「はあ?!」

俺は素っ頓狂な声をあげた。なかなかいいリアクションができたと思う。

「こともあろうに、朝真会館でいっちゃったんだ。雲運運団で一等を操作して宝くじを当てるんだって、って。そしたら朝真会館のボスが目の色変えて、『発表当日、その宝くじを奪ってこい!』って言ったんだ」

話が少しずつ見えてきた。

「ということは、カエルたちは雲運運団の裏切り者で、宝くじを無くした今は、朝真会館からも追われている身になるわけ？」

「まあそういうことだ。雲運運団は幸せを追求する集団で、そう武闘派がそろっているわけではないし、殺しまではしない。けど、問題は朝真会館だ。空手道場は表の顔で、裏は殺し屋稼業をやっている」

「まじで、それまじでやばくないっすか」

「やばい。だから俺達は必至でお前たちを追ってたんだ。この作戦が失敗したとあれば、俺達は命がないだろう」

ミユウちゃんは不思議そうな顔をしてカエルに質問した。

「でもなんで宝くじがベンチにあったの？ もしベンチにペンキで塗りつけてなければ、ハヤトの背中に張り付くことも無かったのに」

ハチマキはバツの悪そうな表情を浮かべた。カエルがミユウちゃんの問いに答える。

「昨夜俺達は雲運運団の目を盗み、神棚に飾られていた宝くじの奪取に成功した。しかしすぐに気付いた幹部たちは、俺達を追いかけた。はじめまくことができたが、いずれ捕まるだろう。とりあえず宝くじはどこか安全な場所に隠し、後で取りに行こうと思ったんだ。しかし普通に隠すのではすぐに見つかるだろう。誰にも予測がつかないような所や方法で隠さないと。そこで手荷物を確認した。俺のバッグには赤いペンキと刷毛が入っていた。タコ頭は白い紙とマジックペン、長方形のビニールの袋を持っていた。これで何かできないものかと考えていると、これが天啓というのだろうか、ベンチが目についたんだ！」

そんなアホな！ どれだけ偶然が重なるんだよ！

「しかしビニール袋はまだしも、ペンキをなんで持ち歩いてるんですか」

「本業がペンキ屋なんだ。いつもこの町の郵便ポストって綺麗だろ？ あれは俺達が下請けで補修しているから維持できているんだ」

どうでもいいや。

「それで宝くじを袋に入れ、ペンキで塗って隠したんですね。“ペンキ塗りたて”と張り紙しておけば、よっぽど注意力が低い酔っ払い以外はうっかり座ることがないものね」

ミユウちゃんが明るくさらりと言った。耳に痛い。

「本当に驚いたよ。雲運運団の追ってにつかまり、隠し場所に案内させられ、行ってみるとそこには背中の後がしっかりついて無くなってたんだから！ 宝くじを見つけ出して取り戻すことを条件に許してもらえる話となった。もちろん逃亡できないように銀玉を持たされてね。今度破棄

したり逃げたり裏切ったりしたら、雲運運団から何をされるか分からない。そして必死で辺りを調べ、背中にペンキがべっとりついた背広を着て、千鳥足で歩くにいちちゃんを見つけたわけだ」

なんかちょっとおっかない気がした。昨夜のうちにもう見つかったわけだ。恐らく時間軸としては、カエルたちに見つかった時にはすでにミユウちゃんが俺の背中から宝くじをはがし、駅に向かっていたのだろう。

「はあ、けどなんでその時俺を襲わなかったんすか」

「そりゃ、時計を見たら十一時だったからな」

はちまきは激しく肯いた。

「雲運運団はどんなに遅くとも十一時までで活動を休止する。そして家に帰り休むのだ。とりあえずお前の方が分かったし、翌日朝に捕まえばいいだろうと思ったんだ」

急に真剣さ、必死さが感じられなくなった。世のサラリーマンも似たところがあるかも知れない。

「でもわからないなあ。なんで俺を捕まえるのが目的の雲運運団なのに、パンダマンは俺の逃亡の手助けをしてたんだ？」

その言葉を聞き、カエルとハチマキはアゴが外れんばかりに口をあんぐりと開けた。

「はあ?! 何のことお!」

「だって、朝あんたたちが家に来るって、電話かかって来たっすよ。で、北北西に逃げろって」

「ヒッチコックかよ!」 (カエル)

「ヒッチコックかよ!」 (はちまき)

二人の声は見事にハマった。それにしても息のあったダブル突っ込みだ。

「なんでパンダマンがお前を逃がすんだよ! 俺に捕まえろって指示したのはパンダマンだぞ!」

今度は俺がアゴを外す……じゃない、口をあんぐりと開ける番となった。

「ええ! どういうことだよ! パンダマンはあんたら使って俺を追わせて、俺には逃げろと言ったのか」

そこで傍目八目で聞いていたミユウちゃんは冷静な意見を述べた。

「パンダマンは黒幕で。雲運運団として宝くじを手に入れる振りをして、一人占めしようとしたんじゃない? それで昔の友達の弁慶を使った。組織を裏切る人間がいてもおかしくない金額よ、億って」

「……確かに」

何故か、ミユウちゃんは云い直した。

「殺人が起きてもおかしくない金額よ、億って」

多分、言いたかっただけなのだろう。しかも可愛い顔で、笑顔でそんなこというと、大好きなミユウちゃんだけど、性格を疑うゾ!

「そうか。畜生! パンダマンは初めから俺たちをはめる気だったのか。そしてとり返すのを失

敗した俺達は雲運運団から追われ、最悪朝真会館から追われ殺されるかも知れない状況に陥った」

「けど話を聞いてみれば、盗んでこいってという無茶な注文に失敗しただけでしょ。怒られるだけでも理不尽なのに、殺されるなんてことはないっしょ」

カエルはかぶりを振った。被り物でふる頭（かぶり）は、違和感のあるずれが起き、気持ち悪い動きになっていた。

「もう朝真会館は二億円入ることを前提に、新しい道場、チョコレートパレスを購入してしまったんだ」

チョコレートパレス？！

「何それ！ 全然道場っぽくないじゃないっすか！」

「でも可愛いわよ」

ミウちゃんは特に違和感を感じてない様子だった。

「そう、その女の子受けが目的なんだ。朝真会館は女性会員がいない。その数を増やし、男性会員のやる気を喚起して、より活気あふれる道場にしようとしているんだ」

やる気はいいけど、他の気も喚起しそう。

「宝くじが手に入らなければ、この計画は没になる。それどころか前金で借りてるお金の分、借金が増えるかも知れないし、キャンセルすれば違約金が発生するかも知れない。そんなことはどうでもいいかもしれない。一番の問題はあのプライドの高いボスが『払えません、ごめんなさい』と頭を下げることだ。頭を下げるくらいなら、不動産屋を皆殺しにしちゃうかも知れない」

おっかない話だな。こっちも随分ムチャクチャだ。俺もムチャクチャな状況に陥り、すごく気持ちが分かる。

「大変だったんすね」

カエルの声は少し明るくなった。身の上を話し、すっきりしたのかも知れない。

「まあそういうことだ。俺たちは腹をくくりボスのところに頭を下げに行く。そしたら朝真会館の武闘派は雲運運団に乗り込み、自ら奪おうとするだろう。もう、俺たちはそこで縁を切り、おさらばする。これだ。これが俺の生き残る道だ」

「朝真会館に、雲運運団の拠点の情報を売るんですね。朝真会館もあなたたちに任せておいても仕事が終わらないとなれば、自ら仕事した方が早く、確実にと考えるでしょうね」

「……なんか、俺をくずみたいにいうな」

「くずじゃないわよ、カエルさんよね？」

ミウちゃんがよくわからないフォローをする。誰も笑わなかった。

「にいちゃん、あんたはどうするんだ。もう関わっちまった以上無関係とはいかないぜ。今朝公園でジャケット脱ぎ捨てたろ。そのおかげで朝真会館はサカナの追跡を行っている。にいちゃんはもう逃げられないぜ」

そうだ、エロスも同じことを言っていた。

「そのサカナの追跡ってなんすか？」

「朝真会館の諜報部の部長でサカナと呼ばれる男がいる。サカナは魚市場で働いているのでいつも魚臭いのだ。そのサカナは超人的な嗅覚をもっていて、半径三十キロ圏内でロックオンした臭

いの場所が分かるんだ」

「へえ、仕事で生臭いにおいを嗅いでる割に、鼻が利くもんなんすね」

「警察で働けばいいのに」

ミユウちゃんがぼそつと言った。喋る警察犬と考えれば確かに役立ちそうだ。

「サカナはお前の臭いを辿って追跡しながら追っていた。最寄りの会員を派遣しながらね。タコヤキに出くわさなかったか？ 鉄の串のようなものを持ってるタコヤキくさい男だが」

「ああ、会いましたよ。電車の中と、さっき、パンダマンに会う前」

「すごく強かったよ！ 弁慶さんと互角かと思ったもん。弁慶さんにはかなわなかったけどね」

「ほお、弁慶ってやつはタコヤキもやっつけたのか。朝真会館の黒帯でかなりの使い手だけどな。普段はタコヤキを焼いてるんだ」

「そう云えばそのタコヤキを助けに、エロスっていう奴が来てたけど、そいつも朝真会館なんすね」

カエルは被り物をしていてよくわからなかったが、ハチマキの顔は青ざめた。

「エロスも来たか……。あいつは本当に危ない奴だ。たいてい殺しの仕事はあいつがやっているという。話の中では本物の拳銃をもっているとか。銃の腕も相当なものらしい」

「よく、何もなかったな」

ハチマキがいった。

「今は俺たちを追う指示ではないからって。でも雰囲気すごく怖い人だった」

「ともかく、サカナの追跡はクリアしないと、お前たちの安全は保障されないな。助けてくれた例に、いい物をやろう」

カエルはポケットから百円ショップで売ってそうな小瓶を二つ出した。

「お前たちはフルーツの王様って知ってるか？」

「はいはいはいはい！」

ミユウちゃんが元気に手を挙げた。

「メロンでしょ？ 病気じゃないと食べれないもん！」

いつの時代だよ！

「違う。ドリアンだ」

場の雰囲気がしばし固まった。

「ど、どりあん？！」

噂には聞いたことがある。そのあまりにも堅く、果肉を取り出すのが大変なくせに、匂いは強烈に臭いという。

「あの、誰もが臭い、不味いという、ドリアンですか」

「そうだ。強烈に臭いドリアンだ」

「けど、フルーツの香りでしょ。王様っていわれるくらいなのに、そんなに臭いわけないじゃない」

ミユウちゃんは騙されないわよ、とでも言いたげだ。

「この瓶にはドリアン香水が入っている。どんな臭いか試すか？」

「お、俺はいいっす」

俺は即座に断ったが、「はいは〜い！ 試す試す！」とミユウちゃんは乗り気だった。

カエルから渡された瓶のふたを開けてミユウちゃんは臭いを嗅ごうとした。俺は鼻をつまみ、息を止めた。カエルはよく分からないが、ハチマキも鼻をつまんでいる。

蓋がわずかに空いた瞬間、ミユウちゃんはキュツと蓋を閉めた。そして叫んだ。

「くっさーい！」

そしてその瓶を「ふざけないで！」と言ってカエルに投げつけた。そして何故か俺の頭を平手で叩いた。

「な、なんで俺を叩くんだよ！」

文句を言ったそばから俺の鼻にもドリアンの残り香が突き刺さった。なぜこんなガソリン臭いものが、植物として生まれてくるのだろうか。

俺の文句にミユウちゃんは「ヤツ当たり」とほほを膨らませて言った。

……ちょっと嬉しかった。

「このドリアン香水をサカナにぶっかければ、サカナの超人的な嗅覚は破壊できるだろう。試したことはないがね、常人の鼻ですらこれだ。きっと追跡は不能になるだろう。

本当は俺とタコ頭用に準備した香水だったが、ひとつ譲ってやる。お互いサカナに遭遇した時に使おう」

こうして俺はドリアン香水を手に入れた。

「けど、サカナは遠隔操作で仲間を俺たちに仕向けて来るんですよね。じゃ、サカナ本人と遭遇することは難しいんじゃないっすか」

カエルはうつむいた。

「うん、そこが問題だ。どうにかおびき寄せる方法があればいいんだが」

しばらく沈黙が支配した。時計を見ると二時十分だった。

「まあ、俺たちは仕事に失敗し、両方の組織からはもう要らないコマなワケだ。朝真会館から俺たちを始末する指令が下る前に頭下げに行けば、命まではとられないだろう。にいちゃんたちも宝くじが手元に無い以上、もう追われる理由はないか」

「そうですね。もう宝くじが無いんだから安全っすよね」

俺も同意してははは、と軽く笑った。が、ミユウちゃんは神妙な顔をしながら話はじめた。

「いえ、あたしたちはまだ安全とは言えないわ。だって、宝くじを奪ったのはパンダマン。よしんば雲運運団はその情報を得ているかも知れないけど、朝真会館はまた別の組織。カエルさんたちは両方に通じてるけど、パンダマンは朝真会館に通じているワケでは無い。そう考えればまだ朝真会館はあたしたちが宝くじを持ってるって思ってるわよ、きっと」

俺は髪の毛をかきむしった。

「だーっ！ そうだった。別組織なんだよな。別組織なら情報が繋がらないわな。なんか一緒くたでみんな同じ気になってた！」

「なんか、一生懸命説明した俺がバカみたいだったな」

「バカじゃないわよ、カエルさんよ」

またミユウちゃんが微妙なフォローを入れた。やや、時間が止まった気がした。

「とりあえず、サカナの追跡を阻止するためにも、サカナ本人に会って、このドリアン香水を使わないとな」

「そのうまい方法が思いつけばいいがね」

少し、沈黙があった。

「が、まあこのままここにいる仕方がない。俺たちもゆっくり油を売ってるわけにもいかんしな。にいちちゃんたちはこれからどうするんだ？」

俺はどきっとした。

「それがまだよく自分でも決めかねてんすよ。サカナの問題もともかく、……ちょっと気になることがあるんすよね。それを確認して、場合により宝くじを取り返しに行こうかと」

ミユウちゃんが目をまん丸く見開き、俺をグウで殴った。

「せっかく安全になったのに！　なんでまた首突っ込むのよ！」

「まあ、これは俺の問題だから、ミユウちゃんは帰ればいいじゃない」

「帰ればって……」

さびしげな表情で俺を見つめる。実際、弁慶に襲われた時に感じたが、もっと酷い目にあわされていた可能性だってある。二億円はそういう金額だ。ミユウちゃんはここでドロップアウトした方がいい。

「危険な目に遭うかも知れない。だから、もうミユウちゃんは帰った方がいい」

俺は真剣な目で言った。ミユウちゃんは大きく息を吸い込み、自慢の小さな胸をぴんと張ると人差し指を俺に一直線に向けた。

「ついていく！　こんな面白そうな話、途中下車できるわけ無いじゃない！　プレミアムミニッツって言ってたわよね。きっと今がそれなのよ。この普通じゃない状況だから、今が特別充実した時間になってる気がする。それにあたしがいなくなれば、二億円は一人占めできるって魂胆でしょ。それは許さない」

「いや、そんなこと、考えるわけない。それに、二億円手に入れたらミユウちゃんにプロポーズするわけだし。結婚したら、結局二億円は二人のモノなわけで……」

「男だったらぐじぐじ言わない！　ついていくったら、ついていく！」

困った。困ったが、嬉しかった。やっぱり一人より二人の方が気持ちも楽だし。

「まあ、そういうことなんで、場合によっては二人で宝くじをとり返しに行こうと思います。俺の考えが杞憂なら、もうそのまま帰るかも知れないっすけど。」

もし取り返すことになった場合、どこに事務所があるのか教えて下さい」

「パンダマンが裏切って逃走してれば、まあ意味がないだろうがね。事務所に戻ってる可能性はあるだろうな。よし、教えよう」

カエルは俺に雲運運団の事務所の場所を丁寧に教えてくれた。場所は俺の住んでるアパートからそう遠くない場所だった。シャッター通りとなった商店街の裏路地だ。

「事務所に誰か留守番がいるかもしれないから、向かいの廃ビルからのぞいて確認するといい。廃ビルの3階の窓だ。扉が壊れている部屋だからすぐにわかるだろう。その窓から事務所を覗けば、ビルからは事務所が覗ける。

そして都合なことに、事務所からは窓への光の反射でこっちの姿は見えない。最適な場所だ」
「ヒッチコック、『裏窓』だ！」

今の今まで黙っていたハチマキが、急に声を出したのでびっくりした。ハチマキのセリフは全員に無視された。

カエルは片手を挙げ、「じゃ、俺たちはこれで失礼する」と言った。そこで俺は「待つて」と制した。

「実は今ひとつ閃いたことがあって。ちょっと気持ち悪いけど、もしかしたら何かの役に立つかも知れないから……」

……。……。……。

「よし、それじゃ今度こそ本当にお別れだ。アディオス、にいちゃん。達者でやれよ」

「ありがとうカエルさん。本当はカエルさん、すげーいい人だったんすね」

「人間、悪い奴なんていないんだよ」

そう云ってカエルとハチマキは去って行った。

「また二人になったね。で、ハヤトはこれからどうするの？」

俺はにやりと笑って得意げに宣言した。

「まずは携帯電話を取りに行く！」

GPS追跡とまったく関係なかった俺の携帯。捨てておく理由はもうないのだ。ならば回収しなければいけない！これが俺にとっての最優先事項だった。

あとがき？ 次回予告？ ひとりごと？

しろあです。

小説を書いていると思うんですけど、読者をいい意味で裏切るのは大事です。

これでどうだ！ という話を書いても、

「やっぱこういう展開になるって思ってたよ」とか「先がよめる展開」とか言われることがあった。

悔しい半面、まあいいやとも思う。別に先よみできる物語が低級とは限らないわけだから。

でも今回はどうでしょう。自分で読み返しながら、「え、まじで？ なるほどな！」と思いましたよ。

意外性ではピカイチじゃないでしょうか。

是非、展開がよめた方、この後の展開がよめる方がいたらご一報下さい。

島田荘司じゃないから、読者への挑戦はしないけどね。

決して難しい話ではないんですけど、ややこしい話になってます。

一回読んだだけではなかなか判りにくいと思いますし、今までの展開を読み返さないと見えてこない部分もあるかと思います。おひまがあれば、読み返してね。

忙しい方は「へ、そんな感じね」くらいで結構です。この後も気楽にお付き合いください。

「ぷれみあむみにっつ」は軽く読んでも面白いし、深く掘り下げて読んでも面白い。そういう作りになっています。

逃げの物語から、攻めの物語へ。今回はちょうどそのジャンクション。

ギャグだけではなく、お話としても、ここからはしっかりと面白くなっていきますよ。

お楽しみに！